



1, 2 草戸千軒町遺跡
出土木簡 (8)(2)
3 尾道市街地遺跡
出土木簡

広島・尾道市街地遺跡

- 1 所在地 広島県尾道市久保二丁目
- 2 調査期間 一九七九年(昭54)十一月七日～八〇年二月七日
- 3 発掘機関 尾道市教育委員会(尾道遺跡発掘調査団)
- 4 調査担当者 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 山県 元
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 室町～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

尾道市街地遺跡は、現市街地下に埋れた中・近世の集落跡(港町)で、昭和52年度から国・県の補助金を得て尾道市教育委員会が調査主体となり広島県草戸千軒町遺跡調査研究所が協力して継続的に行なっている。

今回の調査地点は市街地東部の久保二丁目で、一九七九年六月の大火跡地の一部(五×二mの範囲)である。地表下三・八mまで調査し、十一の層位に分けて遺物を取りあげることができた。主な遺構としては室町時代末期の焼土層から備前焼の二石甕を四個ずつ二列に並べたものが検出されたほか石垣・柱列・杭列などがあつた。

御札は室町時代後半に比定される第八層暗灰粘質土層から土師質土器碗・皿・鍋・釜・備前焼壺・すり鉢・青磁碗・曲物などと共に



尾道市街地遺跡
木簡出土地点図

広島県草戸千軒町
遺跡調査研究所編

『尾道—市街地発掘調査概要—一九七九』

(尾道市教育委員会)

一九八〇年

(山県 元・志田原重人)

9 関係文献

と比較的肉太に墨書されている。右下は五ないし六文字あると思われるが不鮮明で明らかにし難い。

「大般若経轉讀砌也 正月十三日」

32×58×5 011

御札・木札の各一点がある。木札は頭部に小孔を開けた直方体のもので、墨痕は認められない。御札は短冊型の板材の頭部を丸く削ったもので、表面は丁寧に削って調整しているが、裏面は材を割ったままである。

8 木簡の釈文・内容

広島・安芸国分尼寺伝承地

- 1 所在地 広島県東広島市西条町吉行
- 2 調査期間 一九七七年(昭52)十一月～十二月
- 3 発掘機関 広島県教育委員会
- 4 調査担当者 是光吉基・山県 元
- 5 遺跡の種類 寺跡又は集落跡
- 6 遺跡の年代 奈良～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
安芸国分尼寺跡については、従来地名等から国分寺跡の東に隣接する地点が推定されていた。ところが近年宅地化、ほ場整備などが進んできたため、県教育委員会によって保存対策を講ずる目的で尼寺伝承地の調査が開始された。

第一次調査では土壇、溝などが検出されたのみで、寺院跡と断定できる遺構はみられなかった。遺物は木簡の他、奈良・平安時代の瓦、須恵器、緑釉陶器などが出土している。また、中世の土師質土器、陶磁器などもある。

木簡は南北方向の溝(幅一・三m、深さ〇・二m)の中から、奈良・平安期の瓦や須恵器とともに出土した。

なお、一次調査の段階ではこの南北溝を寺域に関係した溝と推定